

ショパンの再来?!

ラファウ・ブレハッチ [ピアノ]

歴史に「もし」は許されないが

歴史に「もし」は許されないが、ブラームスがあと10年長生きしていたらとか、ドヴォルジャークがあと5年長生きしていれば、と思うことがたびたびある。もしそうなら、二人は初期のアコースティック録音に間に合っていたから。ブラームス（ピアノの名手）やドヴォルジャーク（ヴィオラの名手）がどんなテンポで、どんなアーティキュレーションで自作や他の作曲家の作品を演奏していたかを聴くことができれば、解釈上の様々なアイデアを得ることができ、そしてどんなにか楽しいことだろう!!

ショパンの演奏が聴けたなら

この手の妄想にはキリがないのだが、ピアノ好きの切なる願いが「ショパンの演奏が聴けたなら…」というもの。それは叶わぬ夢だが、文献に残され客観的な事実を確認すると、ショパンは「親密なサロンを好み、逆に大勢の観客の前だと硬直し思うように弾けなかった。」「当時のピアノの中では繊細で軽やかなブレイエルの楽器を好んだ。」など。これらの事実だけでも、ショパンが威圧的な演奏ではなく、軽やかで洗練された演奏を旨とした様子がよく伝わる。実際にショパンの演奏に接した同業者や批評家たちの証言を集めると「精霊のように軽やかで透明」「澄んだタッチと天才的なひらめき」「夜にしか香らない花卉のような詩情」「技巧は並外れており、真珠の雨音を聴くように繊細」などなど…。ショパンの鋭敏な感性と響きの美しさを賞賛する言葉が並び。

まさにブレハッチの美点！

こうした賛辞は、そっくりそのままブレハッチの演奏に対する賛辞に置き換えられる。そっと鍵盤に触れた瞬間に発せられるみずみずしい音色、親しい人に語りかけるような親密で美しい抒情、夜の静寂に広がっていくような無限の色彩感…。ブレハッチの演奏に何度か接すると、多くの聴衆がショパン自身の演奏を想起してしまう。同じポーランドの出身とか、容姿がショパンに似ているということもあるが、ブレハッチが「ショパンの再来」と評されるのは、やはりその唯一無二の透明感と抒情性にあるのだろう。さらなる妄想をお許しただければ、「ショパンの再来」が弾くモーツァルトの「トルコ行進曲」はいかなる情緒を描き出すのだろう。ショパン・コンクール優勝、ギルモア賞を受賞など、ピアニストとしてあらゆる栄誉を勝ち得た稀有なる天才ブレハッチの演奏は、私たち聴き手にも豊かなファンタジーの翼を与えてくれそうだ。



2024年2月17日 [土] 14時開演 ラファウ・ブレハッチ [ピアノ] 公演詳細➡

